

グローバル・コミュニケーション・  
スキルとしてのユーモア：  
Joke, Rakugo, Stand-up Comedy, Manzai の  
学びを通じて  
Acquiring the sense of humor as global and  
communicational skills:  
Through the learning experience of Joke, Rakugo,  
Stand-up Comedy, and Manzai

小 向 敦 子  
Atsuko Komukai

## 1. はじめに

Humor is the shock-absorber of life; it helps us take the blows.

By Peggy Noonan (1950-)<sup>(1)</sup>.

“ユーモアは人生におけるショックを吸い込んでくれる

それは打撃を受け止める際の助けになる” (ペギー・ヌーナン)

上の句はジョークではない、名言に当たる。将来的には、諺になるかもしれない。

Here lies

Ezekial Aikle

Age 102

The Good Die Young<sup>(2)</sup>.

“この地に エゼキアル・アイクル眠る 享年 102 歳 善人は若死する”

こちらの 4 行は、カナダ・ノヴァスコシア州にあるイースト・ダルハウジー  
墓地に書かれている。墓碑銘であり、ジョークと言える。

善人は若死にする (The good die young.) は、only を頭につけて“善人だけが早死する”と強調されたり、更に語順を逆転させたパロディとして“若者だけが良く死ぬる”(Only the young die good.) と表現されることもある<sup>(3)</sup>。この事例では、故意に「享年 102 歳」と、相反する内容に並置されることで、辛口の撞着語法となっている。

悪口や嫌味にも感受されるこのような言葉を、よりによって墓石に刻まれるなんて、とアイクル氏を気の毒に感じられる方がいるだろう。一方で、刻まれた当人は殊の外喜んで、草場の影からほくそ笑んでいるかもしれない、グローバル化して止まない現代における、ユーモア・センスを巡る温度差の一例といえる。

本稿では、前半で、ジョーク・落語・スタンドアップ・コメディ・漫才の特徴を、改めて紹介・解析する。その上で後半では、これらを通じた、ユーモアと英語の学びについて、言語・社会・文化人類・政治・歴史・宗教学的背景から考察し、ビジネス・コミュニケーション・教育的な視点も加える。学際的な再考を踏まえて、注目すべき可能性と、注意すべき限界を、明らかにすることを狙いとする。

## 2. スキルとしてのユーモアの紹介と解析

### (1) 語り伝えられるジョーク

日本でジョークは“冗句”の当て字で記されることもある。「無駄な句」あるいは「不必要な文句」と、少なからずの辞書に解説されている。このような理解の仕方は“ユーモア先進諸国”(ユーモアや笑いを、各人が積極的に人生に活用している国のこと。筆者が命名し、本稿に限って使用する)とは、比較にならないほどの食い違いである<sup>(4)</sup>。

よく知られるジョークは「100 万人が笑った」と、本の表題が示すように、国境や言語のバリアを超えて、語り伝えられているもので、原則として作者不詳である。従って何処の国の、誰が言い始めたのか、などと詮索するのは野暮になる。あるいはもし、それぞれのジョークのルーツ(詳細)を辿ろうとするならば、別原稿の字数を要するであろう<sup>(5)</sup>。

個々のジョークの軌跡が辿り難いならば、全体的な歴史を紐解いてみよう。平安時代には、ユーモア溢れる連歌や偏継<sup>へんつぎ</sup>と呼ばれる言語遊戯に興じられていた。江戸時代には、語呂合わせ・駄洒落を端緒とする洒落言葉が楽しまれていた。これらは総称して、現代でも秀句<sup>しゅうく</sup>と呼ばれていることから、日本における“ジョークのようなもの”であったと推測される。

しかし綿密には、語呂合わせや駄洒落と、ジョークは異なる。語呂合わせ・駄洒落は、ストーリー性を持たない、言葉と言葉の音韻（ズレや一致）を楽しむ遊びである<sup>(6)</sup>。対してジョークには、音韻のズレや一致のみならず、セットアップとパンチラインに代表される、文脈に仕組まれた矛盾や不合理など、おかしみの構造が含まれている<sup>(7)</sup>。

前説が長すぎるのは笑えない、プーイングの的であろうから、そろそろ具体的な話に移ろう。次にジョークを、学校・レストラン・病院と、場面別に紹介しながら、分析していく。

Son: Hello, may I speak to the principal, please?

Principal: This is the principal.

Son: I'm calling to say that my son cannot come to school today  
because he has a bad cold.

Principal: Who is this speaking, please?

Son: This is my father<sup>(8)</sup>.

息子：もしもし。校長先生とお話させて頂けますか。

校長：私が校長です。

息子：今日、息子が酷い風邪で、学校へ行けません。そのことを、お伝えしようとして電話しています。

校長：失礼ですが、どなた様でいらっしゃいますか。

息子：僕のお父さんです。

ズル休みをしようと、言い訳を考える児童や生徒は、ジョークになるほどの「あるある」ネタである。そう気づけることで、学生たちがサボろうとして、あるいはサボってしまった後に、必死に繰り上げてくる言い訳にも、溜飲を下げられそうである。

居留守を使ったり、不登校である校長のジョークも複数ある<sup>(9)</sup>。教員と学生の、結局はどこか類縁なところに、笑いながら安堵させられる。

レストラン・ジョークも、豊富な品ぞろえである。まずは定番メニューといえるものから覗いてみよう。清潔さや接待の姿勢に乏しいレストラン、対するクレイマーと化した客は、何処にでもありがちな状況らしい。

Customer: Excuse me, but there's a fly in my soup !

Waitress: Don't worry. We won't charge you extra for it<sup>(10)</sup>.

客：すみませんが、私のスープに蠅が入っています。

ウェイトレス：ご心配なく。蠅の分は、料金を追加しませんから。

お食事中の方がいらっしゃるかもしれず、蠅の事例を引用したが、ゴキブリ入りの場合もある。スープの代わりにシチュー、中から出てきたものはボタンで、落ちが「そこにありましたか、ずいぶん探したのですよ」などもある<sup>(11)</sup>。

このジョークは、相手に対する不信を含む不快感も所詮、ユーモアを用いれば、“笑える”というポジティブな感情に、方向転換できると教示してくれる。ひいては諷刺<sup>いさか</sup>に発展しかねない修羅場さえ、ユーモアの機転で救うことができそうである。

意外に思われるかもしれないが、病院をシーンとするジョークも数多い。それらは医師・看護師・患者、そして患者の近親者との交流が、主な設定となっている。

頼もしくない上に冷血とも思える医師に、委ねるしかない患者。誰もが感じたかもしれない、もだし難い不安をジョークにすることで、自分だけに起こっている惨事ではなく、他者とシェアできる笑い事になる。

Patient: I'm nervous, Doctor. This is my first operation.

Doctor: I know how you feel. This is my first one, too<sup>(12)</sup>.

患者：先生。私、とても心細くて心配なんです。今回が、初めての手術なのですから。

医師：お気持ちはよく分かります。私にとっても初めての手術なので。

医師も患者も初心者で「震えが止まらない」という、派生版もある<sup>(13)</sup>。手の震えた医師による、手術中の「ウップス！」は、患者にとって、最も聞きたくない一言であろう。こんなことがあったら笑えない、は笑うしかない。笑うぐらいができれば、自分で自分を救える。身動きできないほどの深刻な病態であればあるほど、ストレスを溜め込むしかない患者にとって、ジョークはささやかな口答えの手段となる。

Patient: Doctor, I'm getting more and more forgetful lately.

Doctor: When did you first notice this problem? When did this happen?

Patient: When did what happen<sup>(14)</sup>?

患者：先生。近頃、物忘れが激しくて。

医師：その問題に、最初に気づいたのはいつ頃でしょう。いつ起こったのですか。

患者：いつから？何が？起こったですって？（何の話です？）

“最も齢をとっている国”と「ギネス世界記録 2010」に認定された日本発のジョークではないか、と思われる物忘れのネタである<sup>(15)</sup>。しかしその実、高齢化は日本だけが抱える案件ではない。しかも老化に伴う忘却や喪失の体験は、悩んで解決できる範疇ではない。ならば物忘れはもとより、時代錯誤からうっかりミスまで、ジョークで笑い飛ばす方が明るい、前向きな高齢社会になれそうだ。

## (2) Q&A 形式のジョーク

ジョークの中でも、今までは会話形式の例を紹介してきたが、Q&A 形式もある。それらは俗に、なぞなぞと呼ばれ、ユーモア先進諸国で幼少期から、盛んに取り組まれている。

日本では馴染み深いと言えない種類として、Knock-knock Joke、Cross Joke、Light-bulb Joke などがある。Light-bulb Joke であれば、“How many?” で始まるのが通例で、正解ではなく、ひねりの利いた落ちを思いつく、頓智の色合いも強い。

Q: How many writers does it take to change a light bulb?

A: Ten. One to change it and nine to say, “I could’ve done that.”<sup>(16)</sup>

質問：電球を取り替えるのに、何人の作家を要するでしょう？

回答：10 名。1 名は、取り替えるために。9 名は「私も（やろうと思えば）できた（かもしれない）のに」と発言するためです。

ところで、なぞなぞは、どのように日本へ伝わってきたのだろうか。この際、少し触れておきたい。

なぞなぞの起源と思われるものは、中国で紀元前 4～6 世紀、微言・隱語と呼ばれていた。3 世紀になって謎語と呼ばれるようになったが、本来の目的は、王の失政に対して従者が遠まわしに「問い」を用いて、気付いてもらうための弁論術であったとされる。日本へは、奈良時代に紹介され「何ぞ何ぞ」から「なぞなぞ」となった<sup>(17)</sup>。

セットアップとパンチラインで構成されるジョークに似て、なぞなぞも単なる文章ではない。その短いやり取りには、発問と返答のスタイルを借りた、トリックが凝縮されている。

残されている記録の中で、最古とみなされるのは、900 年代末、藤原実方<sup>さねかた</sup>（?～998 年）の家集であった「実方朝臣集」に登場する「なぞなぞ物語」である。“勝たず負けずの花の上の露”とはこれいかに、と問いかけられた実方が“相

撲草合はする人のなければや（合わせる人のない相撲取草、すみれの異称）”と答えた、との記述がある<sup>(18)</sup>。

時代の流れと共に、頓智問答・謎かけ（3 段など）も、巷間に浸透した。無理難題を投問してくる相手には、こじつけでもよい。「お見事」「やられた」と手を打ちたくなる答えて返そうとして知らず知らず、常識を超える頓才が鍛えられる。

Q&A 形式は、ゲーム感覚にも近い。「ゲーム」と聞くとスイッチが入る生徒・学生たちにとって、遊戯性を帯びた、問題解決型のアクティビティやレクリエーション活動になる。ならば学習に取り入れる案は、邪道というよりは、有効手段であろう。

昨今では、東京工業大学や武蔵大学を始めとする数々の大学が、教育にエンターテインメントの要素を盛り込んだエデュ・テイメント (edu-tainment) によって、生徒・学生とその親を取り込もうとする様子が、メディアでも取り上げられている<sup>(19)</sup>。学びは、退屈なものではなく楽しいもの。楽しさの途上に学びがある、を標榜するプレイフル・ラーニングが教育の現場で台頭している<sup>(20)</sup>。

### （3）落語から Rakugo へ

比較的、長いジョークの中には、落語の枕（小噺）として使われるものもある。落語は、絶妙な意味合いや間など、精巧な笑いであり、他の言語では通じない、少なくとも魅力が半減してしまう、と推される傾向にあった。しかし実際は、落語もジョークのように、世界に遍在しつつある。

好例として、古典落語である「転失気<sup>てんしき</sup>」をシンガポールで披露した立川志の春氏によれば、日本で披露する時より、客の反応が良く「そんなに面白いのですか？」と、首をかしげるほどであったという<sup>(21)</sup>。

もちろん留意すべき点はある。古典通りの物語では、弟子が和尚に「転失気」を「盃」と嘘をつき、和尚は「呑酒器<sup>てんしゅき</sup>だったのか」と納得する。しかしこのまま英訳しても、面白さは届かない。そこで「転失気」を、英語としても通じる「酒 (sake)」に変更した<sup>(22)</sup>。

落ちの部分も、本来は「おならも盃も（どちらも）重ねると、（しまいには）ぶうぶうが出来ます」である。「ぶうぶう」は、酔っぱらいへの苦情、糸車や管を巻くときに出る音、に加えて、酒飲みが管を巻く・からむ、を含意する。日本人でさえもわかりづらい江戸言葉である。

そこで「どちらも顔が赤くなります。」へ改変。結果として今後、日本でも使える方向へ変わることができた。国内で大人気だいにんきとは言えない落語が、生き残るための進化を遂げられた、ことになる。

もう少し留意点を見てみよう。イスラム教徒の多い国々で、酒・煙草・賭博・不貞行為（これらが禁じられている場合がある）や犬（不浄の動物と考えている場合がある）、死（宗教によって、死・死後の世界観に違いがある）にまつわる話はタブーである。

ところが「うまや かじ厩 火事」が、パキスタンやブルネイなどのイスラム圏で講演された際には、女性たちも大笑いして、問題がなかった、という<sup>(23)</sup>。いかにも「厩 火事」は、浮気や不倫ではない、夫婦愛の話であったと、遅ればせながら気づかされる。

登場するのは、髪結いというキャリアを持ち、稼ぎが良く、しっかりものの女房。酒呑みでだらしない、怠け者だが優しいところのある亭主。どこの国にもいそうなダメ男へ、深い愛情を注ぐ女の可愛らしさは、実に普遍的な脚本であり、欲待されたのであろう<sup>(24)</sup>。

日本語のまま、字幕を用意して、落語を行うこともできる。欧州6ヶ国をツアーした経験を持つ春風亭一之輔氏は、落語を行う前に“蜜の団子”や“長屋”など、難解と思われる言葉を、写真で示して「これが団子です。おいしいです。これが長屋です。壁が薄いです。」と解説した。尚「かみしも上下を切る」など、落語家に独特の演じ分けの方法や、権力のある人の声は低く、間抜けな人の声は高くなど、落語の手ほどきを伝授するミニ講座も開催した。この方式であれば、国内の落語初心者に向けても、敷居を低くする効果が見込めそうである<sup>(25)</sup>。

そもそも落語は、無精・強情・狡猾・吝嗇・臆病・短気・好色・身勝手・あわてんぼう・おせっかいなど、短所とされる性格や、物知らず・知ったかぶり・負け惜しみ・うぬぼれ・酔っぱらい・おしゃべりなど、誰にでもありがちなマ



イナス面を、あたかも標本のように、戯曲化して語る<sup>(26)</sup>。これらを、人間らしさとして、素直に改心してもらうために、滑稽味に富んだお説教の中から、最後に落ちがくる話を僧侶がまとめた<sup>(27)</sup>。落語には、仏教の説法を原点とするが故の不易さがあり、それが世界の人々にも訴えられる理由となっている。

映画のエンドロールには、監督・主演俳優から、音響・照明に至るまでの、数々の名前が連ねられる。それを一人の語りで繰り広げる落語の世界には、BGM も、ワイヤ・アクションもない。使うのは胸元の扇子と手ぬぐい程度。裏を返せば、大道具や舞台装置に頼らずとも、体ひとつで全て用が足りる。

一方で落語は“和服で正座”“畳に座布団”と見るからに古臭いというか、ややもすれば汲み取り式トイレまで連想しかねない。しかしこの人力・手動の、時代遅れなモノクロが放つ衝撃が、彩色鮮やかなる、至れり尽くせりの時代に、却って瞠目の的となりうる。そうは考えられないだろうか。

#### (4) スタンドアップ・コメディへの挑戦

落語は Rakugo と表される時もあるが、シットダウン・コメディと英訳されることもある。これは、コメディアンが立ち姿勢で面白い話をする様式がスタンドアップ・コメディと呼ばれているため、それを座って行う、との解釈であろう。

漫才が、スタンドアップ・コメディと訳されることもある。しかし正しくは、スタンドアップ・コメディは、日本における落語と漫才の、中間に位置するように思われる。

スタンドアップ・コメディと漫才を、同一視できない徹底的な差違は、前者が通常、独り語りの芸であるのに抗して、後者はボケとツッコミなど、二人以上の掛け合いの技法に則るところにある<sup>(28)</sup>。

スタンドアップ・コメディのよくある流れとしては、くすぐりとなるワン・ライナー・ジョークあるいは小噺を用いて、口火を切る。この点は、落語における枕に似ている。

観客に、笑いやすくなるための準備体操をしてもらった上で、本領を発揮する。最新の映画など時事ネタから、誕生日を忘れられたなど自虐ネタまで、ス

ピード感あるしゃべくりやジェスチャー、音楽やマジックも交わり、個性豊かなワンマン・ショーとなる。

ところでワン・ライナー・ジョークとは、実際どのように展開されるのだろうか。同音異義語や類似音意義語が、暗喩と共に用いられた Job Joke を例に、少し覗いてみよう。

[あ] My first job was working in an orange juice factory, but I got canned.  
Couldn't concentrate.

[い] Then I tried to be a chef - figured it would add a little spice to my life,  
but I just didn't have the thyme.

[う] After that I tried to be a tailor, but I just wasn't suited for it. Mainly  
because it was a sew-sew job.

[ア] can は canned (缶詰にする) と get canned (解雇される) で違う意味。  
concentrate は、(ジュースなどを) 濃縮する、と (仕事などに) 集中する。  
缶詰状態にされた挙句に解雇された、ジュース濃縮作業は到底集中  
できる仕事ではなかったことが、暗に示されている。

[イ] spice は料理の調味料と、転じて人生における刺激、の意味。thyme は  
ハーブの名称であるが、time の類似音でもある。

[ウ] suit は (服の) スーツ、(服が) 似合う、(仕事が) 適する、の意味。sew  
は“縫う”の英訳だが、sew-sew で so-so (まあまあ、ぼちぼち) を連想さ  
せる。

解説を、この辺で終わりにしてもよいが、もう少し続けることもできる。

[え] My career as a comedian was a stand-up success, but the critics  
thought I was a big joke.

[お] Next, I became a musician, but eventually I found I wasn't noteworthy.

[か] After many years of trying to find steady work, I finally got a job as a

historian until I realized there was no future in it <sup>(29)</sup>.

- [エ] stand-up は、持ち堪えられる・立ちながらの・お笑い芸人、の 3 つの意味。発するジョークが面白いのではなく、単なる笑われ者であった彼(女)が、コメディアンになった、そのことが周囲にとっては、どうやら最も笑える箇所であったようだ。
- [オ] noteworthy は注目されるべき・目立つ、の意味。楽譜が music note であるため、敢えて note を用いて、楽譜を書く（作曲する）のも読む（演奏する）のも、振るわなかった雰囲気醸し出している。
- [カ] future は歴史の対語としての未来・将来と、自分の前途・成功の見込み、の意味。また work は、仕事をする（働く）の他に、作動する（動く）。仕事をしたくない以前に、余り動きたくないであろう性癖を想像させる。

もう少し続けてもよさそうだが、この辺で終わりにしておこう。

## （５）漫才から Manzai へ

歴史においては、スタンドアップ・コメディより、漫才の方が遥かに長い。  
せん・ずまんざい 千秋万歳と呼ばれていた平安時代、千年万年の長寿繁栄を祈念した漫才は、ことほぎ言祝  
の芸能である他に、信仰であった<sup>(30)</sup>。文献上の初出は、平安時代後期、「しんざるごうき新猿楽記」  
(1058-65 年頃、藤原明衡・著)に、都で流行している猿楽の一種として「千秋万歳之酒袴」が記されている<sup>(31)</sup>。

笑わせる従者の才蔵（鼓で伴奏しながら、滑稽なしぐさや洒落言葉で笑いを取る）と、真面目な主役である太夫（扇を広げて舞い・歌いながら寿ぐ）が、今で言うボケとツッコミの配役に酷似している。

スタンドアップの歴史は、イギリスでは 18-19 世紀にミュージック・ホールで始まった。アメリカでは更に遅い 19 世紀後半、ボードビルやバラエティショーで活躍し、名を上げた芸人たちが、衣装ではないスーツ姿あるいは自前の私服で、しかもしゃべり芸だけでステージに立つようになった<sup>(32)</sup>。

1970 年代になり、人気テレビ番組の MC へと登用される花形スターたちが

出現した。お笑い芸人が「冠番組を持つ」動向は、日本へも押し寄せている。

漫才は、コントや喜劇とは隔たり、大掛かりな舞台装置や衣装効果を極力使わず、聴き手の想像力を借用しながら、演者の技巧で笑いの世界を広げていく。この点は、落語と共通しており、彼らさえ行くなれば、何処であつても、環境を選ばない。手ぶらでもできる。

しかしプロとなるためには、(落語も同様であるが)漫才も、声の抑揚(強弱・勢い)・緩急(間・リズム感)・表情(明暗・視線)・所作(相づち・生態の描写)諸々、修練が求められる<sup>(33)</sup>。

落語がRakugoであるように、漫才もManzaiにしか翻訳できない。どちらも今日まで、長い歴史を生き<sup>ながら</sup>存えて練磨されてきた、日本が誇る伝統芸能である、と表現しても言い過ぎにはならないであろう。

これより先は、更に広く認識されて、世界の“皆のもの”になると予想される。次なる段階の発展に期待しつつ、以下にこれらを学ぶ際の関連・考慮事項について、異なる学問分野から言及させて頂く。

### 3. ユーモアと英語の学びについての考察

#### (1) 言語学から振り返る

英語のジョークが笑えない、面白くないと言われることがある。その理由のひとつと考えられるのは、前述のワン・ライナー・ジョーク(83頁)にも登場したが、同音異義語(ダブルミーニング・掛け言葉)や類似音意義語(語呂合わせ・押韻)、そして比喩や誇張などの修辞法が用いられるからであろう。

即ち、平常の翻訳とは異なり、罣が仕掛けられているため、頭の中で各人の変換機能が、言い得て妙な訳解をしなければ、と苦悶する。そうしているうちに、面白さが勢いを失い、台無しになってしまう、からであろう。

反対に、上手い翻訳ができるようになれば、面白さに変わる。特に英訳では、どうすれば滋味を伝えられるか、と頭脳を酷使できることが、醍醐味になる。改めて、古典落語の「時そば」に出てくる、客の男が蕎麦屋に語りかける、実際の場面を見てみよう。

本来の台詞は「商売はどうだい？売れ行きが鈍い？まあ、そんなこともあるさ。“商い”っていうくらいだから“飽きない”でやることだ。」である。「アキナイ」が掛け言葉として使われているが、日本語が母国語でない人にとっては、笑いそびれてしまうポイントである。

そこで英語落語のパフォーマーでもある、神奈川大学・外国語学部の大島希巳江教授は、英訳に次のような工夫を凝らした。「How is your business? Slow? Well, it happens. You will get busy sometime. That's why it's called busy-ness.」（・・・まあ、そんなこともあるさ。きっとそのうち忙しくなるよ。だから“商売は忙しい”てんだよ）<sup>(34)</sup>。

この機会に、英語と日本の特徴についても、おさらいしておこう。まず英語に比べて、日本語では丁寧語・敬語・謙譲語が複雑である。英語ならば「I」で済むところ、とりわけ落語は、私・あたし・あたい・僕・俺・おいら・わし・拙者・あちき、となる<sup>(35)</sup>。名乗っただけで、性別・年齢・相手との間柄・身分の階層がある程度、分かるようになっている。

また英語はIやWeなど、主語から始まる文体が多い。これは、主体が誰であるかが重要な情報となるためである。さらに英語では、文章の前半で、否定か肯定かが分る。これは、どちらのサイドであるか、立場を不詳にしておくことを潔しとしないためであろう。

対して日本語では、主語が省略されやすく、最後まで聞いていないと、肯定文なのか否定文なのか、未明である。誰がやったのかを主張しないほど慎ましく、最後まで結論をひき伸ばし、できれば否定しない言い方で、丸く収めようとする丁寧さ、と解釈できる。

しかし別方向からみると、最後まで相手に、自分の手の内を明かさず、最悪どんでん返しもありうるという、典型的な「後だし」作戦とも考えられる。つまり英語は、日本語に比較して、自己主張するとか、否定することを躊躇わないなどと、安直には結論付けられない。

現に日本語でも、褒められた時には「とんでもありません（Not at all!）」と、相手の意見を果敢に否定する。この点、英語のほうが「Thank you.」と素直に受け止めて、褒めてくれた相手を肯定する。

「全然お変わらない」も、相手への全面的な否定である。歳月を経て、少しは成長できることを願うユーモア先進諸国の人にとっては、聊<sup>いささ</sup>か喜べない、どころか無礼とさえ思われかねない言い回しである。

私たちはどうしても、自らの育った環境を基準として、物事を捕えがちであるが、それが自分たち以外を、不当に評価する見解になってはならない。国内で報道されている、入手できる情報には既に、自国に都合のよいバイアスが掛けられている可能性もあり、異言語の学びを通じて、自文化中心主義（ethnocentrism）への考慮も深めたい。

## （２）社会学的な気づき

日本人が、自虐ネタや謙遜を言っているつもりでも、ユーモア先進諸国の人には、自慢や言い訳に聞こえる場合がある。典型例としては、プレゼンテーションなどの、始めの挨拶が「連日忙しく、十分に準備ができておらず、お聞き苦しい所もあるかと思いますが・・・」である。

忙しいことの自慢、準備ができなかったことの言い訳、が含まれていると指摘されれば、その通りであり、いわゆる日本人が得意のモデスト・ブラッグ（Modest brag：謙遜自慢）と判断されても致し方ない<sup>(36)</sup>。ユーモア先進諸国でイントロが、その場の緊張をほぐす、もしくは空気を暖めるために、ジョークで始まることとは対照的である。

彼らにとって自虐ネタは、自分のコンプレックスや、おかしてしまった失敗を、笑って加工・修正する。いわば自虐的に見せかけた自助作用であり、結果として、自分を成長させる効用がある、と受け止められているのだ。

このような、思考や行動の違いは、社会の在り方に少なからず感化されている。しばしば引用される社会学的な用語として「ハイ・コンテクスト社会」（単一に近い民族国家で、社会常識を共有する。話し手が多くを話さない代わりに、聞き手の能力に期待する）と「ロー・コンテクスト社会」（多民族国家に多く、社会常識がバラバラ。寡黙であることを評価せず、話し手の責任を重視する）がある<sup>(37)</sup>。言わずもがな、日本はハイ・コンテクストに分類される。

またお互いを気軽に、ファースト・ネームで呼び合わなければ、却って余所余所<sup>よそよそ</sup>しいと思われる「横社会」。「店長じゃない店主」「部長じゃない本部長」と役職名にまで拘り、序列を重んじる「縦社会」という表現もある。従来、日本は縦型に分類されてきた。

しかし近年では、メディアで持て囃されているのがダブル（ミックス）タレントであったり、呼称もできるだけ「さん」を使うなど、ハイ&ロー・コンテクストや縦・横社会の標準が、適切とは言い難い。グローバル化現象が、それぞれの社会の規範を順守して生きる、規範社会の住人である私たちにも、確実に影響を及ぼしているようだ。

### （３）文化人類学からの忠告

一国の中でも、特定の地方住民を対象にして作られる笑いはリージョナル・ジョークと呼ばれる。中央に位置する主流団体が、地方の亜流集団<sup>しゐ</sup>を恣意的に笑いの素材とし、中枢（内野）v.s.末端（外野）という設定で、訛り具合や過疎度をジョークに仕立て上げるものが多い<sup>(38)</sup>。

「中枢から末端」へ向かう反対勢力として、中央（のお偉いさん）を、地方（の田舎者）が笑うジョークもある。これらは必ずしも現実<sup>やから</sup>に照合されている訳ではなく、権力欲に溺れて重鎮<sup>やから</sup>ぶる輩を皮肉のスタイルを採っている<sup>(39)</sup>。

皮肉は、相手に対する意地悪を含む、攻撃的なユーモアである。しかも時には「すごく奇麗」や「最高に格好いい」などと、それが事実ではない人へも、ふっかけるのがユーモア先進諸国流である。

落語の登場人物として、粗忽者や御上りさんを、公然と笑いものにする組立て方に近い。しかし現実の会話で、このような言葉使いは挑発的に思えて、日本人にとっては「引いて」しまう。

その代わりに編み出されたのが、お世辞であろう。よいしょ（軽度）から褒め殺し（重度）まで、巧妙且つ盛んである<sup>(40)</sup>。お世話になっていない相手に「いつもお世話になっております」と述べて、平然としている私たちの態度は、身近な“よいしょ”の例であり、こちらの方が、ユーモア先進諸国から見れば、強烈な嫌味で「引いて」しまうかもしれない。

しかも日本人は（褒めていない）<sup>こび</sup>媚に対しても（まるで褒められたかのように）丁寧に対応する。嘘に嘘で返す、不必要な不自然さと誤解されやすい。

エスニック・ジョークの起点に、このような違和感の存在があり「仲間同士の強化」と、その裏返しである「異質分子の排除」の要素を、部分的と<sup>いえど</sup> 雖も抱え込んでいる<sup>(41)</sup>。従ってよそ者に対する差別意識なのでは？と、猜疑する見もありそうだが、それよりは陰に隠れず、目の前で笑いものにする方術と考えて、差し支えないであろう。

関連して、地震や火事など、被害を話柄にするディザスター・ジョークもある。災害に遭遇したばかりの人を“可哀そう”と気の毒がられるだけの弱者ではなく、自分と同等に見なす。関わろうとしないのではなく、関わろうとするからこそ、生じる関係性の中で、笑い者にしてあげられることを、むしろ優しさや愛情の証拠である、と考える境地に達しているようだ。

ただしひとつ、この“笑ってあげる”という考え方には、とりわけ教育機関において、警戒が必要である。それは“いじる”笑いが“いびる”や“いじめ”にリンクしかねないからである。

最早、ボケとツッコミ形式の会話は、大人から子どもまで、日常的に使われている。ボケが自ら笑いを齎そうとするの対して、ツッコミはどちらかと言えば、いじる役に当たる。安全な場所から、他者の間違いを訂正する、やや他罰・嘲笑的な立場、とも換言できる<sup>(42)</sup>。

私たちにとって、ぼける側よりいじる側になるほうが容易であり、現代の日本は“一億総ツッコミ・タイプ”と揶揄される程、ダメ出し派が大概である<sup>(43)</sup>。このような状況も一因してか、集団ではいじられ役が、すぐにも固定されやすい。本来であれば発言されるべきではない「ばかかおまえ」などの台詞が、笑いを取るために、許されている偏向も否めない。

誰かを犠牲にして得られる笑いは、仲間外れやいじめの構造と、いずれ折り重なる危険性を孕んでいる。笑いに内在するダークサイドとして、配慮が不可欠である。



#### (4) 政治との交わり

かつて、エスニック・ジョークで「日本人にジョークを言うと3度笑う」と言われていた。3度とは、話をした時、意味を説明した時、そして何日か経って意味がやっとわかった時、である。私たちは、面白くなくても愛想笑いをするがユーモアの感性は欠落している、と思われていたようだ<sup>(44)</sup>。

因みに「日本人にジョークを言うと1度しか笑わない」もある。こちらは、話をした時に愛想笑いをするだけで、意味がわかることはないから、らしい。

政治家も、例外ではなく「ユーモア・センスに欠ける」と酷評されてきた。しかし上のジョークが既に、現代の私たちに当てはまらないように、現役の政治家の中にもユーモリストがいる。

2013年、安倍晋三首相が米国訪問中に有力シンクタンク、米戦略国際問題研究所(CSIS)を訪れ、講演を行った。テーマは「Japan is back (日本は復活した)」であったが、冒頭部分で、2期目に帰り咲いた自らに重ねて「I am back. And so shall Japan be.」と切り出した。

和訳では「私は復活しました、そして日本も、再びそうなるでしょう。」になる。俳優であり、政治家でもあるアーノルド・シュワルツネッガー氏の名台詞「I'll be back!」をもじった、米文化のシンボルと呼ぶにふさわしいハリウッド映画への、敬意と好意の表明でもあった。

聴衆の反応は、笑いから拍手へ変わり、安倍氏はThank you!と呼応して、スピーチを続けた。この時の模様は、インターネットで全世界に同時中継されて、日米同盟関係を印象づける契機となった<sup>(45)</sup>。

麻生太郎氏のウイットも格別である。総理就任直後の2008年、国際連合総会で演説した際、3分ほど話し進めた後に、翻訳機が故障のため、機能していないことが判明した。その時「It is not a Japanese machinery, no?」と一言。和訳では「(この翻訳システムは)日本製の機械じゃないんじゃない?」になる。

当時、<sup>バンギムン</sup>潘基文氏が国連事務総長に就任し、国連スタッフに韓国人を雇用したり、韓国製の機材を導入したことによる、出費の増大が囁かれていた経緯もあってか、会場からは笑いと拍手が、麻生氏に贈られた<sup>(46)</sup>。

俳優や歌手が、物真似をされてこそ一人前と言われるなら、政治家もジョークを通じて語り継がれてこそ一人前、という考え方ができそうだ。世界を相手にせずにはいられない政治の舞台で、彼らの更なる見せ場を歓迎したい。

また現今の、殉教主義的なグローバル・アクティビズムにおいても、ユーモアによって発想の切り替えができれば、思い詰めているルサンチマンの執念を脱力させ、やがては暴力となって結合しがちな怨念をも、骨抜きにできる<sup>(47)</sup>。ユーモアには、攻撃性を帯びかけている萌芽を、標的と定めて攻撃することで、事態を未然に、笑いのシーンへと和らげる治癒力がある。レストランや病院のジョーク（85頁）でも、見聞した通りである。

## （5）歴史との繋がり

落語や漫才、ジョーク本に留まらない「笑いの文化」が、前代未聞のレベルで大流行したのは江戸時代、別けても文化文政期であった。しかし、その時代に書かれた借金の証文に、驚くなかれ「万一返済<sup>おこた</sup>息<sup>おこた</sup>においては人中にてお笑いくださるべく候」というくだりがある。「もし返金することを怠った場合には、皆の衆の前で笑いものになる」の意味である<sup>(48)</sup>。

この証文は、商人が書いたものだが、笑いものになる仕打ちが、ましてや武家階級においては、自画像を失墜させる（いわば死刑に匹敵する）制裁であった様子を伺わせる。人様に笑われることを、何を以ってしても回避したい恥辱と断じた、その頑なさに逆行する趨勢として、笑い（憩<sup>うが</sup>いや穿<sup>ち</sup>）が切望され、供給されたのであろう。

確かに、一笑に付すことで、権威や現実の価値を、瞬時<sup>むげ</sup>で無下にする笑いがある<sup>(49)</sup>。笑いの持つ破壊力が、敬遠されていたのも頷ける。さりながら、今にして思えば“笑われ恐怖症”（gelotophobia：笑われることに怯え、特に自分に向けられた笑いに対して過敏<sup>おび</sup>に反応してしまう）の域に陥っていた可能性も否定できない。

その名残なのだろうか、現代でも折角微笑んでいるのに「何が可笑<sup>おか</sup>しい？」と因縁<sup>いんねん</sup>をつけられる。「なんで笑ってるんだ？」と喝を入れられる。かなり親し

い間柄であっても「笑われた」と感じれば「喧嘩を売っているのか」と隙意<sup>げきい</sup>を招くこともある。

笑われた＝ばかにされた、と通釈する劣等意識は、現在も健在らしく、ユーモア先進諸国で、自身が笑われることを“美味しい出来事”と喜ぶ受け止め方からは翻<sup>ひるがえ</sup>っている。彼らは（日本では笑いを押し殺そうとするであろう）真面目な式典や行事の最中にも、ユーモアが割<sup>たしな</sup>って入るのを楽しみにし、また自身もそうできる能力を嗜<sup>たしな</sup>みと弁えている<sup>(50)</sup>。

特にイギリスでユーモアの素養があることは、紳士淑女のミニマム・スタンダードと解される。恰も日本で、真面目さが信頼を獲得するのに欠かせない要素と、高く評価されることに近似している。

江戸時代ではない現代となって、たとえ公衆の面前であろうと、笑われものになるだけで返金から逃れられるなら、それを「助かった」と感じる日本人の方が、圧倒的多数であろう。*Harakiri* や *Chonmage* など、日本に興味を持って、学んでくれている方々の時代的混乱を招かぬよう、念のために書き添えておく。

## （6）宗教の視点

宗教によっては、神や死を、笑いの対象としてはならない。一方で、墓石にジョークを彫るなど（75 頁）、死を笑おうとするユーモア先進諸国の考え方もある。

最たるものは、死刑囚のジョーク（Gallows Humor）と呼ばれるジャンルであろう。人間として失格で「死ね」の烙印を押され、後は死ぬ以外にすることのない罪人が、しかも執行の土壇場でもできること、それがユーモアを吐く余地である、との着想は秀逸であると言わざるを得ない。

実際のジョークとしては、いよいよ絞首台に立たされる際、囚人同士が After you! と礼儀正しく、先を譲り合う。いざ首にロープをかけられる囚人が、嬉しそうな顔をするが、それはロープとは別にもう一本、上から垂れている、虫歯の方へ結びつけられた糸のおかげ、などである。

私たちにしても、生まれた時から、死へのカウント・ダウンが始まる人生で、最後は全員もれなく死ななければならず、人は誰でも死刑囚といわれる。悲しみも絶望も通り越し、一身にとつての最期に瀕して、死に怯えるばかりではなく、個人の人生の儚さを、世間の世知辛さ諸共、笑ってやろうという精神は、捨てたものではない。

京都大学・こころの未来研究センターのカール・ベッカー教授によれば“世界で一番死を恐れているのは現代日本人”とのこと<sup>(51)</sup>。国民の3割（以上）が無神論者（もしくは多神論者）であると、世界から認知されている私たちが、死への尽きない不安に苛まれた、痛々しい姿に写るのであろうか<sup>(52)</sup>。信仰心に支えられる・られないに関わらず、死をもユーモアで飾ることができる未来が、いつの日か訪れることを願いたい。

前に紹介したメディカル・ジョークの中にも、重症の患者を笑う「良いニュース・悪いニュース」シリーズがあり、広義では死刑囚のユーモアに入る。再度、事例を紹介するが、不謹慎とを感じるか、死を通じた生への讃辞オマージュとを感じるか。死を題材とするユーモアには、多様な見解があることを付言しておきたい。

“I have some good news and some bad news,” said the doctor.

“First for the good news. You’re very sick and have only 24 hours to live.”

“You call that good news?” sobbed the patient.

“What could be worse than that?”

“I should have told you yesterday.” said the doctor.

“良いお知らせと悪いお知らせがあります”と医師がいった。

“良いお知らせは、貴方がせいぜいあと24時間の命だということです。”

“それがよい知らせなら悪い知らせとは何ですか？”患者がむせび泣きながら尋ねた。

“それを昨日、お伝えできなかったことです。<sup>(53)</sup>”

## (7) ビジネス・ツールとしてのユーモア

予てより、シルクロードや大海原を渡ってきたのは、物品だけではなかった。それらを有利に取引しようとすればするほど、簡潔な一口サイズのリップ・サービスとして、ジョークは磨きをかけられてきた。

現代においては、ユーモラスな CM が、その流れを汲んでいるように思われる。短いメッセージで自社製品への注意を引き付け、記憶に残る。他者と同じでないことで、選ばれやすい効果を発揮している。

とは言うものの、日本では長らく、ビジネスマンが余計なサービスをして滑ってしまうことを危惧する風潮があり、ユーモアは出る幕を憚られてきた。対峙して、ユーモア先進諸国のビジネスマンは、まず最初に面白い話題で、アイス・ブレイクをするほど、ユーモアを重要視している。

取引に関わって、同じコートに立つ以上、中軸となるビジネス・マナーから逸すれば、それは自分たちの不利になる。ユーモアのトスを上げたり、時にはドリブルして魅せなければ、アドバンテージを取られてしまう。

コミュニケーションにおいては、キャッチボールが大事と言われるが、ビジネスには、ドッジボールの一面もある。無難な受け答えに終始するばかりではなく、積極的な攻めが、詰めの一手となりうる。5 時過ぎの、接待の席でも、笑わせてまであげる“おもてなし”を今後は、日本式の企業文化として、世界に向けてアピールしたいものである。

かたや、アメリカの企業文化には、上に立つ人ほど、リーダーの素質としてユーモア・センスが必須との考え方がある<sup>(54)</sup>。私たちにとっては、俄かには同意できない内容であるが、尤もな根拠<sup>もっと</sup>とは何であろうか。少し説明を費やしてみよう。

確かに、深刻な面持ちで叱られると「許せない」と、感情が注意を与えてくれた相手へ向かってしまい、素直に従う気持ちになれない時がある。そこで、叱るべき点(ボケの部分)を、一旦救って(フォローしてあげて)から叱る(ツッコム)、もしくは先に叱ってから救うと、反感を緩和できる。ボケとツッコミ方式は、大切なことを相手に、できるだけ素直に気づいてもらうための、指導法として活かすことができる<sup>(55)</sup>。

何をやらかされても、褒めてしかあげられない上司より、言いつらいこともユーモアに包んで指摘してあげられれば、部下を思う気持ちが、伝わる。感謝され、<sup>ちゅうたい</sup>紐帯が育まれる。

「かけがえのない人などいない」と言われる組織の駒が「あの人でなければならぬ」と、替えの効かない存在になれる。なるほどリーダーに、ユーモアのハイ・センスは肝要である。

## (8) コミュニケーション・スキルとしてのユーモア

悠遠の昔、コミュニティを作って生活し始めたヒトは、相互に「伝えたい」と願った。コミュニケーションという、通じ合う術を紡ぎ出した<sup>(56)</sup>。しかし現代になって、日々のコミュニケーションには、対人葛藤・対人摩擦など、様々な対人ストレスが付きまとう。

そもそも私たちには「今、幸せですか」と聞かれて、十分に幸せな人も「そうではない」と答える国民性がある<sup>(57)</sup>。些細な不幸を重大な不幸に、思いあぐねる真面目さがある。

真面目さは良いが、一際、渦中の人は深刻になりすぎてしまう<sup>(58)</sup>。このような時、ユーモアが不幸を軽減する、頼もしい技量になる<sup>(59)</sup>。

悩ましい・悲しいこと、みつともない・恥さらしなことも、結局全部笑える。迷惑をかけられた・騙されたことも、全てまとめて、笑いは不幸を忘れさせる<sup>(60)</sup>。失敗も貧乏も、笑った者の勝ちになる。

しかも渦中を過ぎて、後になって振り返れば、悲惨だった思い出ほど、大きく笑える語り草となる。自分にとっての傷口や汚点だったはずが早晩、武勇伝に変わり、自慢できるようになる。

自慢、と聞いて想起される、厄介な笑いがある。それは、蔑称で失礼するが、親父ギャグと呼ばれ、誇らしげに「どうだ、面白いだろ?」「ここで笑え!」と言わんばかりに、繰り返し語られることがしばしばである。しかし一度聞いて笑えなかった(笑えなかったのも、聞こえないフリをした)ネタは、二度三度聞いたからといって笑えるものではない。得意の、愛想笑いで急場を凌ぐしかない。

急場、と聞いて連想されたのだが、笑いはその場（瞬間）の、いわば鮮度が大切な“生もの”である。しかし同時に、パロディや物真似など、変形を施される度に、新たな命を吹き込まれ続ける“加工品”でもある。

トルコに伝わる「ナスレディン・ホジャ（Nasrettin Hoja）」の物語には、落語の「こんにやく問答」とそっくりの話がある<sup>(61)</sup>。虎の本場、インドには「動物園」によく似た話がある<sup>(62)</sup>。面白い笑い話は、それを語る人と共に旅しながら、世界に通底する“天下の回りもの”となっている。

面白いことには蓋<sup>ふた</sup>ができない。誰でも面白さの種<sup>たね</sup>を、周囲に撒きたい。幸せのお裾分け<sup>すそわけ</sup>がしたい。そして喜んでもらえた喜びで、自分もまた笑う。分割するほどに倍増する面白い話は、私たちにとってコミュニケーションを図ろうとする動機になる。

どの時代に、どの国に生きるかに関わらず、古今東西、自身の中にもある、憎み切れない人間らしさを、私たちは面白く語り継ぐことで“人間の業”として、肯定してきた<sup>(63)</sup>。それは生きとし生けるヒトのための、ヒトをヒトたらしめる叡智<sup>ちえ</sup>であったのだ。

## （９）教育に取り入れられるユーモア

海外で、スタンドアップ・コメディが一人芸であるのに対して、日本で漫才師といえば２人組が多い。それは、個人の面白さというより、相方あつての自分という考え方があり、恐らく小さい時分から受けてきた教育の影響がありそうだ<sup>(64)</sup>。

日本における教育の特徴の一つとして、仲間と上手く折り合いを付けながら、いかに自分の能力を発揮できるか、協調性と個性の双方を重んじる、が挙げられる。その教育の現場で近年、漫才を取り入れる新たな動きがある。

読んだ本を漫才形式で書評する“ビブリオ漫才”に取り組んでいる公立小学校や“自分史漫才”を年間カリキュラムに取り入れている公立高校が現れた<sup>(65)</sup>。医師や看護師を養成する大学や、企業における新人社員教育でも、芸人や構成作家を講師に迎える、漫才が採用されるようになっている<sup>(66)</sup>。

漫才を構成するに当たって、イメージを膨らませる（発想力・情操力）、どの順序で話すかを吟味する（展開力・文章力）など、論理的な能力が鍛えられる。人前に立つ・趣旨を伝えようとするなど、コミュニケーション力・プレゼンテーション力も伸長できる。全くもって漫才は、協調性と個性の、どちらの学びにも適している。

英語落語に関しては、今年度の文部科学省検定済みの教科書を、幾種か捲ってみたところ、中学生向けの『One World (3)』（教育出版）、『New Crown (3)』（三省堂）、『New Horizon (2)』（東京書籍）や、高校生向けの『Genius English Communication (1)』（大修館書店）に掲載があった。

長い間、英語教育では、単語や文法の習得に重きを置いたためか、This is a pen など、実生活で一度も使う機会のない文章が学ばれてきた。「すみません！」は“I’m sorry”ではなく“Excuse me”であり、「もう勘弁してください」は“Forgive me”ではなく“Leave me alone”であることさえ、中・高で学んだ後の大学生が、理解していると言い難い現状を誘発してきた。その反省点を活かすべく、人生に不可欠な表現に富んだ落語が、教材として見直されているようだ。

語学の学習者にとって、“通じた”という自分なりの達成感より、笑ってもらえたという相手からの好反応が、励みになる<sup>(67)</sup>。落語を披露し、喜ばれる体験を通じて、彼らの中で“ウケる”が“受け入れられる”へ連鎖する。そのことがモチベーション・アップへも結び付くと期待したい。

因みに、大学レベルにおける英語落語の情報としては、在学生の学習成果をお披露目する発表会が開催されたり、同好会が結成されている。また留学生や学外者も参加できるイベントやプログラムとして、英語落語会を主宰する大学もあるなど、枚挙に<sup>いとま</sup>遑がない<sup>(68)</sup>。

#### 4. まとめにかえて

福澤諭吉（1835-1901 年）は、「学問のすすめ」の著者として、一万円札の絵柄として、名と顔を広く知られる「言論文筆の人」である。しかしその同じ



人物が生前、ユーモア教育の重要性を強く主張していたことを、知る人は少ない。彼こそは、「笑いは学習者の興味を引き理解力を促進させる。よって一瞬の内人情や世の中の有様を会得させる独特の力がある」と唱え続けた、当時に稀な教育者の一人であった<sup>(69)</sup>。

そんな福澤氏は明治 25 年（1892 年）、滑稽談 351 篇を集めた「開口笑話」を出版した<sup>(70)</sup>。その序文には「教育の目的は唯才徳の発達を促すに外なれども其方法は千差万別際限ある可らず。就中、奇言を放て人の好奇心に投じ一笑の間に無限の意を寓して自から人情世態の裡面を会心せしむるが如きは教育法の捷徑にして却て有力なるもののあるが如し。」と記されている<sup>(71)</sup>。

現代語に意識すると「ジョークで笑い、それらを味わうことは単に暇つぶしなどではなく、人生に益するところが多いにあり、才徳の発達を促すと言う教育の目的に充分かなっている。まさに人生世態の見えない所を悟らせる、教育法の近道として有効である。」となる。彼にとって「開口笑話」が「もうひとつの学問のすすめ」、もしくは「裏・学問のすすめ」であった気がしてならない<sup>(72)</sup>。

漫言や漫画を、初めて新聞に取り入れたのも、他ならぬ彼であった。1882 年、自ら手腕を振るって「時事新報」を発刊し、風刺のユーモアを以って、政治や国際外交に物申す姿勢を示した。重井檜梨・妻利湍内・音無九四郎などのペンネームを使つては、執筆に加わったのである<sup>(73)</sup>。

プレイフル・ラーニングの「プ」の字が出る、edu·tainment が発案される（81 頁）遙か以前に、福澤氏がここまで、笑いを教育に取り入れることを推奨し、そして自らも笑いの力を行使して見せていた史実には、驚きに近い感歎を禁じ得ない。

本稿では、笑いの中でも、英語のジョークと小噺を、短簡から難解までである中でも、初級を引用した。中学・高校・大学のみならず、社会人・シニア層に向けての、ライフ・ロングな趣味講座としても実施できる発展性を、念頭に置いたつもりである。

また落語や漫才の笑いについても述べてきたが、こちらは英語学習とは切り離して、楽しさ・面白さを研究するユーモア学のみでの開講もできるであろう。いずれにしても、普及が急がれる。

というのも近い将来、語学の学びを巡っては、明治維新を超える大波の変容に迫られる。翻訳技術が急激に進化して、マシンを味方に付けて、10ヶ国語以上を自在に操るハイパー・グロットの続出も想定される。

そのような未来には、必ずしも英語だけが主要言語ではないかもしれないが、ユーモアを使いこなせれば、潰しが効く。ユーモア・センスは生活習慣、あるいは特長・特技として、一度学べば一生使える。身につけて、損にも邪魔にもならない。

面白い話を聞いて、不機嫌になる人はいない。美味しい物を食べて、怒り出す人がいないように<sup>(74)</sup>。ユーモア・コミュニケーションこそは、世界の人々が交歓できるグローバル・リテラシーであり、これからの時代の世界共通語なのである<sup>(75)</sup>。

遡ること 17 世紀「楽しませることができる、は最も楽しいことだ」と発言したのは、モラリストで作家のラ・ブリュイエール（仏：Jean de La Bruyère, 1645-1696 年）であつた。自分が楽しむことは元<sup>もと</sup>より、他者が楽しむために、労を惜しまない人間になる。そのことで他者も自分も笑顔になれる人間性<sup>ヒューマニティ</sup>を、ユーモアを通じて、ヒトは習得できる。

ユーモアを学ぶ。ユーモアで学ぶ。グローバル市民の笑顔に思いを馳せる時、注意すべき点を補って余りある、その持つ可能性が、今までの何時より強く、希求されている。

こう述べて、ユーモア学を礼賛して終わっては、ユーモアの奥義を語りながら、妙味に欠ける。従来、戯文の帰結は「上げ」ではない「落ち」であるべきで、浅学を棚に上げた菲才が気炎を上げすぎると、折角の笑いの話題も笑えなくなる。思い返し、自戒する次第である。

---

#### 注記および参考文献・サイト

- 1 Fred Metcalf. (2003). *The Penguin Dictionary of Jokes*. London: Penguin Books, p.150.
- 2 ライアン・マッケイ&クリス・メイナード監修 (2004 年)『世にも奇妙な遺言集』

- 半田良輔訳、ブルース・インターアクションズ、201 頁。
- 3 Rosemarie JarSKI. (2004). *The Funniest Thing You Never Said*. London: Ebury Press, p.499.
- 4 はかま満緒 (2007 年)『世界が嗤う日本のジョーク』リヨン社、110 頁。
- 5 早坂隆氏の著書に『100 万人が笑った“世界のジョーク集”傑作選』(2011 年、中央公論新社)がある。
- 6 木村洋二・編 (2010 年)『笑いを科学する』新曜社、56 頁。
- 7 Jay Sankey. (1998). *Zen and the Art of Stand-up Comedy*. New York: Routledge, p.31.
- 8 Joseph Rosenbloom. (1996). *Jokes*. New York: Sterling Publishing, p.339. 立川談志 (1999 年)『家元を笑わせろ』DHC、267 頁。本書は、立川談志が、18 歳の頃から 40 数年に渡って外国の joke を集めた一冊で、本稿で度々引用する。後輩の落語家たちにとっても、ジョークのバイブル的な存在となっている。
- 9 立川談志、上掲書、268 頁。
- 10 National Geographic Kids. (2012). *Just Joking*. Washington, D.C.: National Geographic, p.142.
- 11 立川談志、前掲書 8、241 頁。
- 12 Joseph Rosenbloom, op. cit., p.260.
- 13 立川談志、前掲書 8、301 頁。
- 14 Fred Metcalf, op. cit., p.13. 立川談志、前掲書 8、313 頁。
- 15 国際連合・経済社会局 (United Nations, Department of Economics and Social Affairs) の調査により、2010 年、日本で生存する人口の平均年齢が 44.8 歳と、236 ケ国中、最も高いことが分かった。World Population Prospects (<http://www.un.org/en/development/desa/population>)
- 16 Fred Metcalf, op. cit., p.183.
- 17 鈴木棠三 (2009 年)『ことば遊び』講談社学術文庫、132 頁。
- 18 鈴木棠三、上掲書、144 頁。
- 19 日本テレビ「Zip」2016 年 8 月 4 日放送。
- 20 上田信行・中原淳 (2013 年)『プレイフル・ラーニング』三省堂、130 頁。
- 21 立川志の春 (2013 年)『誰でも笑える英語落語』新潮社、3・4 頁。
- 22 立川志の春、上掲書、38 頁。
- 23 大島希己江 (2009 年)『英語で小喃!』研究社、106 頁。
- 24 立川志の輔・大島希己江 (2008 年)『落語英語で世界を笑わす』研究社、28 頁。
- 25 『Switch (特集: 進化する落語)』(2014 年 2 月)スイッチ・パブリッシング (Vol.32.No.3) 54 頁。
- 26 織田正吉 (2013 年)『笑いのころ・ユーモアのセンス』岩波書店、17 頁。
- 27 森下伸也「笑いの花咲く国へ」木村洋二・編、前掲書 6、25-42 頁、39 頁。
- 28 井上宏 (2003 年)『大阪の文化と笑い』関西大学出版部、210 頁。
- 29 Jokestop (<http://www.jokestop.com/2s6>)  
Workplace-Humor Matters (<http://www.humormatters.com/workplace.htm>)
- 30 織田正吉、前掲書 26、5 頁。
- 31 緒田正吉 (2010 年)「万歳から漫才へ: その歴史と笑い」至文堂・遍『国文学・解釈と鑑賞 (特集: 日本人と笑い)』(第 75 巻 5 号) ぎょうせい、47-53 頁、46 頁。

- 32 Stand-up comedy ([https://en.wikipedia.org/wiki/Stand-up\\_comedy](https://en.wikipedia.org/wiki/Stand-up_comedy))
- 33 西条昇 (2003 年) 『ニッポンの爆笑王』 白泉社、5 頁。
- 34 大島希己江 (2013 年) 『やってみよう！教室で英語落語』三省堂、36 頁。busy-ness は造語。
- 35 立川志の春、前掲書 21、92 頁。
- 36 パトリック・ハーラン (2014 年) 『ツカむ！話術』 角川書店、59 頁。
- 37 パトリック・ハーラン、上掲書、125 頁。
- 38 クリスティ・デイビス・阿部剛 (2003 年) 『エスニック・ジョーク』 講談社、62 頁。
- 39 クリスティ・デイビス・阿部剛、上掲書、90 頁。
- 40 Lorie Brau. (2008). *Rakugo: Performing Comedy and Cultural Heritage in Contemporary Tokyo*. Maryland: Lexington Books, p.82.
- 41 森下伸也 (2003 年) 『もっと笑うためのユーモア入門』 新曜社、88 頁。
- 42 榎田雄司 (2012 年) 『一億総ツッコミ時代』 星海社、55 頁。
- 43 榎田雄司、上掲書、34 頁。
- 44 森佳子 (2002 年) 『笑うオペラ』 青弓社、20 頁。
- 45 Ministry of Foreign Affairs of Japan:2013 年 2 月 22 日 (<http://www.mofa.go.jp>)
- 46 United Nations Webcast : 2008 年 1 月 3 日 (<http://www.un.org/webcast>)
- 47 渡邊太 (2008 年) 「グローバルな運動におけるユーモアの潮流」 ユーモア・サイエンス学会・『笑いの科学 Vol.1』 松籟社、96-103 頁、100・101 頁。
- 48 ひろさちや (1989 年) 『逆発想の仏教論・非常識のすすめ』 すずぎ出版、167 頁。
- 49 板村英典 「笑いのトリオン・モデルと社会的リアリティの構成」 木村洋二・編、前掲書 6、189-202 頁、201 頁。
- 50 佐藤志緒理・ガレス・モンティース (2003 年) 『WIN-WIN 交渉術！ユーモア英会話でピンチをチャンスに』 清流出版、59 頁。
- 51 NHK 教育テレビ 「こころの時代」 2012 年 4 月 29 日放送。
- 52 Washington Post : 2013 年 5 月 23 日 (<https://www.washingtonpost.com/a-surprising-map-of-where-the-world's-atheists-live>)
- 53 アレン・クライン (2001 年) 『笑いの治癒力 II ・ユーモアと死と癒し』 片山陽子訳、創元社、57 頁。
- 54 大島希己江 「会話から生じる笑いとビジネス・コミュニケーションのユーモア」 ユーモアサイエンス学会・編、前掲書 47、90-95 頁、94 頁。
- 55 瀬沼文彰 (2008 年) 『笑いの教科書』 春日出版、132 頁。
- 56 『Switch (特集：進化する落語)』 前掲書 25、50 頁。
- 57 五木寛之・帯津良一 (2009 年) 『生きる勇気死ぬ元気』 平凡社、23 頁。
- 58 土屋賢二 (2011 年) 『幸・不幸の分かれ道』 東京書籍、7 頁。
- 59 青砥弘幸 (2015 年) 「現代の若者の笑いに関する実態とその課題」 日本笑い学会 『笑い学研究 (第 22 号)』 47-61 頁、48 頁。
- 60 『KAWADE 夢ムック文藝別冊 (総特集：立川談志)』 (2013 年 7 月) 河出書房新社、64 頁。
- 61 森下伸也 (2000 年) 「笑いの比較文化論的研究をめざして」 国際ユーモア学会・『国際ユーモアシンポジウム：西欧のユーモアと東洋の笑い』 35-36 頁、35 頁。
- 62 立川志の春、前掲書 21、60 頁。

- 63 『KAWADE 夢ムック文藝別冊（総特集：立川談志）』前掲書 60、23 頁。
- 64 大島希己江、前掲書 34、14 頁。
- 65 小学校・高校の実名は、堺市立中百舌鳥小学校、大阪府立金岡高校。
- 66 中井宏次「笑い和社会現象」至文堂・遍、前掲書 31、133-140 頁、137 頁。
- 67 大島希己江、前掲書 23、V 頁。
- 68 英語落語発表会は大阪樟蔭女子大学、英語落語同好会は文京学院大学。留学生・学外者向けの英語落語イベント・プログラムは、東京工業大学や京都大学などで開催されている。
- 69 飯澤匡（1995 年）『武器としての笑い』岩波書店、200 頁。
- 70 長島平洋（2000 年）「日本のジョーク」日本笑い学会・編『笑い学研究（第 7 号）』日本笑い学会、19-33 頁、19 頁。
- 71 福澤諭吉（1986 年）『福澤諭吉の開口笑話：明治の英和对訳ジョーク集』飯澤匡現代訳、富山房、3 頁。
- 72 長島平洋「日本のジョーク」日本笑い学会・編、前掲書 70、19-33 頁、20 頁。
- 73 坂本浩一（2001 年）「福澤諭吉と申します」日本笑い学会・編『笑い学研究（第 8 号）』日本笑い学会、149-154 頁、153 頁。
- 74 上野行良（2003 年）『ユーモアの心理学』サイエンス社、108 頁。
- 75 中村耕二（2007 年）『グローバル時代の英語教育』英宝社、215 頁。